

「舟を編む」 ★★★

2013（平成25）年3月14日鑑賞

賞＜松竹試写室＞

監督：石井裕也

原作：三浦しをん『舟を編む』（光文社刊）

馬締光也（編集部員）／松田龍平

林香具矢（馬締の下宿の大家の孫娘、板前の卵）／宮崎あおい

西岡正志（次第に辞書作りに愛着を持ち始めるチャラ男）／オダギリジョー

岸辺みどり（女性誌から異動してきた若い女性編集者）／黒木華

タケ（馬締の下宿先・早雲荘の大家さん、林の祖母）／渡辺美佐子

三好麗美（玄武書房社員、西岡正志の恋人）／池脇千鶴

村越局長（玄武書房の局長）／鶴見辰吾

佐々木薫（玄武書房の女性契約社員）／伊佐山ひろ子

松本千恵（松本朋佑の妻）／八千草薫

荒木公平（定年間近のベテラン編集者）／小林薫

松本朋佑（日本語研究に人生を捧げる老学者）／加藤剛

宮本慎一郎／宇野祥平

江川／森岡龍

戸川（辞書の装丁デザイナー）／又吉直樹（ピース）

小林／斎藤嘉樹

編集者／浪岡一喜

ポスターの女優／麻生久美子

2013年・日本映画・133分

配給／松竹、アスミック・エース

＜石井裕也監督に期待したが・・・＞

2012年の本屋大賞を受賞した三浦しをんの原作『舟を編む』を、若手有望株の石井裕也監督が映画化。満島ひかりをヒロインに起用した石井監督の『川の底からこんにちは』（09年）はオリジナリティあふれるすばらしい作品だった（『シネマルーム25』164頁参照）ため私は本作にも大いに期待したが、本作はイマイチ普通の出来・・・？

＜辞書作りの大変さがはじめて映画に！＞

辞書作りがどれ程大変な仕事かは普通の人にはなかなかわからないだろう。しかし、書面作りが大半の仕事占める弁護士稼業を40年間、映画の評論書きの仕事をして12年間続けている私には、言葉と文章の大切さはよくわかっているし、レイアウトと校正の大変さもよくわかっている。

そんな私が本作で興味深かったのは「用例採集」（言葉集め）と「語釈執筆」。『大渡海』は「今を生きる辞書」つまり「社会が劇的に変わることによって溢れ出る新しい概念や言葉も積極的に掲載し、略語、俗語、若者言葉も取り入れ、今までにない“今を生きる人たちにに向けた辞書”を目指す」そうだから、用例採集は大変だ。また、語釈執筆は辞書作りの生命線だが、それは一体誰が？辞書作りの大変さがはじめて映画に！

＜辞書作りをテーマとした「人間ドラマ」だが・・・＞

1995年にスタートした『大渡海』の製作は、2010年に完成するまで15年間もかかったが、それも当然。しかし、その大変な作業の担い手は？本作の主人公になるのは、玄武書房辞書編集部のベテラン編集者・荒木公平（小林薫）の後継いだ変人扱いの男・馬締光也（松田龍平）。「右」という言葉を説明できるかい」と荒木から言われた馬締は「西を向いた時、北にあたる方、が右」「他にも保守的思想を右と言うな・・・」と説明したが、さてこの男の能ミソは？

辞書作りをテーマにした原作だから、それを映画化しても冒険映画のようなアクションはもちろんドキドキ感、ハラハラ感が期待できないのは仕方ない。そこで、本作は『大渡海』作りの中での、馬締を中心とした人間ドラマを描いていく。その中心は馬締の恋人となる板前修行中の林香具矢（宮崎あおい）、『大渡海』の監修担当の松本朋佑先生（加藤剛）そして、馬締の少し先輩でお調子者の編集者・西岡正志（オダギリジョー）らだが、それだけのコンセプトで約2時間の映画にするのは少し荷が重い・・・？

＜「恋」の語釈執筆は？「語釈執筆」に注目！＞

本作のプレスシートには「玄武書房」の他、13種類の辞書における「恋の語釈」が載せられているが、この比較は興味深い。近時の学生のレポートではネット情報を丸々コピーしたものも多いそうだが、出版社のプライドをかけた辞書作りでは絶対にそんなことはできない。ちなみに、玄武書房における「恋」の語釈は、馬締が長い間住んでいる（住まわせてもらっている）早雲荘の2階に、大家のタケ（渡辺美佐子）が高齢になったため新たに引っ越してきた孫娘・香具矢への恋心が募り、告白し、それが容れられる中で馬締が考え抜いたものだが、その出来はなかなかのもの・・・。その他、本作においてはとにかく語釈執筆に注目！

他方、本作後半には出版予定日に向けて学生アルバイトを動員して「校正」にラストスパートをかける姿が描かれるが、私の体験ではこれはムリ。我が事務所では通称「校正大臣」と呼ばれるスーパー事務員がいるから、ここに校正を任せれば大丈夫だが、いくら大量の人間を動員しても、それが不慣れな人ばかりだったら、校正にならないことは明らかだ。

＜15年は長い？それとも・・・＞

一冊の辞書作りに15年間もかかったと聞くと誰でも驚くが、辞書作りの作業の膨大さを考えれば、それくらいかかるのは逆に当然。しかし、本作はあえて1995年～1996年の2年間と2008年～2010年の2年間における辞書作りを軸に展開される人間ドラマを描いていくが、さてこの15年は長い？それとも・・・？

この間に、西岡と恋人の三好麗美（池脇千鶴）は結婚し子供までできていること、タケさんはもちろん監修の松本先生も完成した『大渡海』を自分の目で見ることなくガンで死亡したこと、等を考えれば15年は長い。しかし、出版記念パーティーの席で、馬締と荒木が共に改訂版のことを考え、既にため込んでいる用例採集を見せ合うシーンを見ると、15年なんて短いもの・・・。

馬締からのたどたどしい「恋の告白」を聞き、それを受け入れたのは、香具矢が「馬締って、面白い。」と感じたためだ。しかし、本作ラストには松本先生の家からの帰り道、太陽の光にキラキラと輝く海を見ながら2人で交わす短い会話が登場するが、そこでの香具矢の返事も「馬締って、面白い。」というもの。そんなシーンを見ていると、馬締にとっても香具矢にとっても、『大渡海』作りの15年間は短いもの・・・。

2013（平